

# 宇宙の果ての一分間

大村伸一

A まず言語が発見される

-2 秒～4 秒

三秒前まではあえて表記するなら「あふい rr おく m む p」というような名前であったそれは汎宇宙公認考古言語学者の中でも宇宙の言語についての最も完璧な知識を備えながらも、まだ新しい言語の発掘に余念がなかった。そして、この辺境の死に絶えた星の内部でとある現象こそが新しいというか失われて久しかった現在宇宙で誰一人知らなかった古代の言語を丁度三秒前に発見した。

電磁波の反復によって記録されていたその言語は、時間と空間を利用した極めて粗雑な言語の記録法だった。極めて古い時代の言語なのだろう。空間とはいかにも古めかしい概念だ。認識における極めて陥りやすい間違いの一つだが、それを避けることは容易い。今なら、そのかわりに七つの概念があって極めて繊細な表現が永遠にしかもどこにいても近くできる。しかし、その七つの概念のとてもなじみ深いはずの名前が何故か思い出せない。おやおかしいなと思ううちに、七つの概念自体が希薄になって、そんなものが存在するなど妄想のように思え、まあいいかと言おうとして自分の体は「まあいいか」を発音するための口と舌を備えていないことに気づく。「口」と「舌」にしても言葉と文字表現とその意味までもを思い浮かべることはできるが、実際にそんな器官を持った知性体をこれまでに見たことがないことに気づき、すこしほっとした。

記録媒体を見つけたのは偶然で「すたにしゃむふ」写本についての記録を知らなければただのあれだと思ったのに違いない。「あれ」というのは、宇宙ではありふれていてあまり上品とは言えない例のあれのことであり、誰でも知っているものなのだが言葉が出てこない。今気づいたが、三秒前からずっと違和感を感じていたのはそもそも「忘れる」という現象だ。記憶していたことがなくなるなどあり得ないことではないか。あまりにも馬鹿げた空想上の現象だとは思えない。すると、「七つの概念」にしろ「あれ」にしろ初めからなかったものを、まるであったもののようを感じているだけなのに違いない。まだそのほうが納得できる話だ。

自分の体の表面を覆う銀色の体毛を初めて見たような驚きとともに見つめてしまった。鏡で確認しなければ確かなことは言えないが、これが体毛であるとしたら、私はクマの縫いぐるみにそっくりではないか。なんてかわいいんだ。でも、これは体毛ではないし、私はクマの縫いぐるみではなくかわいくもない。そもそもクマの縫いぐるみなどという生物が物理的に存在し得るなどと誰が想像しただろうか。

体毛のように見えるそれは「DNA」の進化した姿だ。新しい環境に直接触れることで変化を素早く DNA に記録し即興で進化をとげる、そのための器官だ。感覚に乏しいので望ましくない情報を取り込むこともあるが、それぞ進化の醍醐味ではないか。そういえば、指導教官もそんなことを言っていた。

「情報とは秘密のことです。誰もが知っていることは情報とは言いませんからね。言語表現は情報を担います。言語とは秘密だったのです。誰に対する秘密なのかは、また別の秘密なんですが」

と言って、彼はにやりと笑い間を置いてから話を続けた。

「情報は伝わるのに時間がかかります。他の七つの概念（記憶から脱落）においても同様（何が同様なのか不明）。しかし、言語自体は骨格です。個々の表現でなく、それらの表現を支配する法則ですからね。言語に限界はありません」

記憶が混乱しているのでなければ指導教官は狂っていたのに違いはない。

四秒前までは「あふい rr おく m む p」と呼ばれていた彼は、曖昧な思い出に耽っていて、体毛のように伸びた DNA が発掘された記録媒体にたっぷりと触れていたことに気づかなかった。DNA はこれまで触れたことのないあるいは懐かしい言語情報に触れたため、むさぼるようにその言語に適応を繰り返した。

「これは日本語だ」

五秒前までは「あふい rr おく m む p」と呼ばれていた、汎宇宙公認日本語学者の禁他池彦彦はようやくその言葉が日本語と呼ばれていることに気づき、身体中に冷汗のような違和感を感じながら叫んだ。叫んだといっても勿論彦彦には口も舌もなかったのもそれは空想の上でのことでしかないのだが。

彦彦はまだ気づいていないが、既に彼は五秒前まで知り尽くしていた宇宙のあまねく言語に

ついでに知識を失って、そのかわり二十一世紀初頭に使われていた日本語のほぼ完璧な知識を持つ日本語学者になっていた。勿論、五秒前に彼が日本語を知ったそのとき、宇宙から日本語以外の言語が消滅したことなど知りうべくもない。

禁他池彦彦は、惑星のさらに地下にあるはずの古代日本語層の発掘を始めようと再び地面の掘削をはじめた。

## B ファーストコンタクト

### 15 秒 a

「艦長、奇妙な物体が接近しています」

「お。ファーストコンタクトの時間だな」

「この宇宙は広大すぎて、六十秒に一度、この宇宙のどこかでファーストコンタクトが起きているのだ。少なく見積って」

「あれか。あの黒い岩のような。どう見ても星から剥離した岩石だな」

「艦長あれは昆虫です」

「「昆虫」？」

「ご存知ありませんか？」

「いや、知っている。十五秒前まではまったく知らなかったことも覚えている。何か奇妙だ。知っているが、見たこともなければ、今お前がいうまで聞いたこともなかった。そうかあれが昆虫か」

「艦長。わたくしも十五秒前までは知りませんでした。しかも、あれを見た瞬間「昆虫」という言葉が思い浮かんだのですが、あんなものを見たのは初めてです」

「思考干渉攻撃なのかもしれん。警戒体制をとれ」

「すでにオレンジ警報です」

「そもそも、今我々のつかっているこの日本語は、どういうことだ」

「どういうことだといわれますと？」

「急速に消滅しつつある我輩の記憶によると、この日本語は、十六秒前までは使うどころか宇宙に存在すらしなかった言語ではないか。それなのに、今や我輩のみならず艦隊の全ての乗員は日本語を使い、十六秒前まで使っていたはずのあの、もうなんというなまえであるかも表記できないあの言語は単語一つも思い出すことができない。思い出すことができないのはしかたがない。まあいいか」

「艦長。艦内の装備の使い方が分からなくなったという報告が多数」

「日本語で操作を表現することは無理だろうが、今はそれしかない。なんとかしろ」

「はい。艦長。昆虫岩石知性体より信号が来ました」

「見せてみろ」

「それが変なのです」

「なにがだ」

「それが一言「はじめまして」と」

「礼儀正しい宇宙人ではなかと。なんだと」

「そうなんです。どう見ても日本語なのです」

「ファーストコンタクトの相手が同じ言語を使う確率は？」

「マイナス五億分の一です」

「つまり、そのメッセージは「はじめまして」に見えるが、文字通りの意味ではあり得ないということだな」

「艦長のおっしゃる通りです」

「翻訳班を呼べ」

15 秒 b

体内の空間が共鳴する振動は 15 秒前から日本語の発音が急に下手になった。それ以前はどうだったかという、よく覚えていない。

外骨格に発達した感覚器官が近づくもののあることを知覚している。ふふふ。駄洒落みたいだ。

欠落のない記憶によればそれは明らかに知性体による制御を受けている。ははは。欠落があったらそれは記憶とは呼べないよな。そしてそのパターンは既知のいかなる生命体とも異なる。

表面は液体金属に覆われていて-----中心部まで同じ物質が充満していることを確認した。金属の中をその金属とは異質な物質の-----微細な粒子のようなものが蠢いている。これが知性体の-----正体。

これは、魚類だ。魚というものは見たことがある。対称な骨格を中心に運動器官がまといつき、表面を金属皮膜が覆っていた。この知性体はそれとは違い骨格がほとんど発達していない。中心にごく小さい球形の塊がある。これが骨で、運動器官はそのまわりを包んでいる。見た目は泡粒といってもよいだろう。単独で取り出せば分解してしまい見ることはできないが。ふはは。

ファーストコンタクトだな。いいだろう。メッセージを送ろう。

17 秒 a

「では、翻訳をはじめます」

「ふむ」

「「はじめまして」ですが、これが日本語ではないとすると」

「日本語ではないことは明らかだ」

「では、日本語ではないのでまるで日本語のように読める内容に惑わされずに解釈することが肝要です」

「まず「はじ」ですが、これは漢字では「恥」と書きます。この文字は心臓に耳を近づけるということを表しており、そのことから、何らかの通信行為を意味しているのですが、「心臓」と「耳」についてはご存知でしょうか」

「意味はわかる」

「心臓とは身体の中で時間を計測する器官で、耳はその時間を伝えるための器官ですから、「はじ」は「時間を教える」かまたは「時間を教えてください」のどちらかの意味になります」

「ふむ」

「次の「めま」は、我々翻訳班でも解読が難航した部分です。「めまぐるしい」「めりーくりすます」「めめんとまりー」など様々な説が立ち並び、結論はでないのではないかと思われた矢先、我々の主任翻訳官が素晴らしい洞察を」

「結論を言え」

「は、はい。つまり「めま」は「まめ」の表記間違いです。極めて自然な間違いなので、間違いと言うより自然現象というべき」

「先を」

「は、失礼しました。では「まめ」とは何かと申しますと「豆」であります。「豆」といいますのは、刑罰の一種で鍋に閉じ込められ蓋をされ、そのうえ下から火であぶられるのです。残酷です。あ。「火」についてはご存知」

「知っている。次」

「この豆が時間とどう関係するのかは、文章全体を逐語解読したあとに説明いたしますが、次は「して」です。ところが、この「して」だけでは解読不能なのです。数学的に不可能です。しかし、諦めることなく翻訳班は不眠不休で議論し一つの大きな」

「次」

「は。結論といたしまして、これは「して」ではなく「めま」の「ま」と「し」をつなげた「まし」と読まなくてはならないのです。これを専門用語で「音韻れ」」

「そこはいい」

「そうですか。残念です。で「まし」というのは「増加する」または「増やす」というほどの意味であります。そして、最後は「て」ですが、これはここまで解読すれば一つしか意味はありません

ん。「手」です」

「個別に解説ができればあとは簡単なものです。つまり「はじめまして」というメッセージは「時間を教えてください。刑罰は増加した手です」という意味以外にありえません」

「で？」

「で、と申しますと？」

「それはどういう意味なんだ？」

「ええと。言葉どおり」

「我輩にはお前たちの意味が分からんのだ。普通の言葉で言ってくれ」

「あ。はい。んと。つまり、かのエイリアンは時間を尋ねているのです。宇宙で最も不確かなのは時間ですから。で、教えてもらえたら他でもない手によって、いつになく厳しい刑罰を与える」と言っているのです」

「ふむ。どうも友好的なメッセージとは思えなくなってきたな」

「艦長。「刑罰」という言葉の意味が我々とは違っているのかもわかりません。なにしろファーストコンタクトですので、性急な結論は」

「お前の言う通りだ。様子をみなくてはならんな。では、我輩もこう返事をだそう「はじめまして」」

20 秒 b

液体金属の表面に漏らしてシミができたかと思って大笑いしていたが、あれはどうもメッセージだったようだ。

こうして読めば「はじめまして」何度読んでも「はじめまして」だな。

そもそもファーストコンタクトの相手が同じ言語を使う確率はマイナス五億分の一だ。確率につけられたマイナスはそのありえなさを驚きとともに数値化したという記号だから、まず、このメッセージは見かけどおりの意味ではありえない。するとどういうことになるのだろう。

まず冒頭の「は」は、文章の中で最も重要な言葉なのだから「序破急」の「破」以外に考えられない。日本語に対する深い知識と文化についての教養をこれみよがしに示している。威嚇だろうか。「序」に当たるのは勿論こちらから送ったメッセージのことだろう。それに対して「破」という返答とは破れかぶれになっているのか。つまりこれは威嚇だろうか。まあ、最後まで読んでみよう。

次の「じめ」は「湿り気」を意味する。「占める」「閉める」「絞める」も捨てがたいが初対面の相手にそんなに攻撃的な言葉を使うとは思えないからな。それとも、威嚇だろうか。彼らは魚なのだから「湿り気」という解釈が最も適切だし、その場合は友好の気配さえ感じられる。

そして「まし」は「増し」だ。「湿り気」を増せば水没しそうなものだが、彼らの生態からみて、金

属没というべきか。それほどに「破」だというのだろうか。だとすれば、やはり威嚇なのか？ここまで読んできて、最後に「して」とくればもう「して」は「仕手」以外に考えられまい。このメッセージの語り手は「能」に関する知識をひけらかしたくて仕方がないのだろう。その奥床しさには失笑を禁じ得ない。しかも自分こそが「仕手」であると言っているわけだ。魚とは傲慢なものだな。

それにしても「破」とは-----これは威嚇というレベルではない。宣戦布告という意味ではないか。

いや、どう考えてもそれ以外にはあり得ない。メッセージはこう解釈されなくてはならない。「宣戦布告であることで思考は占められている。交流を閉め、お前の首を絞めるのである。(首とはなんだ?)。そんな気持ちが増してくる。俺は宇宙の中心」

宣戦布告と恫喝のメッセージである。それ以外には読みようがない。

「疑いようがない、うたがいよーがなーい」とうまく駄洒落を織り交ぜつつ歌いながら、戦略的戦闘蜂の生産を開始した。準備ができるまで三秒ほど時間稼ぎが必要だ。メッセージを送る。

24 秒 a

「返答がきました」

「読んでみよ」

「「友好の贈り物を贈ります」です」

「文字通りの意味である確率はゼロ以下か。仕方が無い、翻訳班、訳せ」

「は。お任せください。ではさっそく」

「冒頭の「友好の」は「友女子の」が通信時圧縮アルゴリズムのバグにより変形したのですが、もともと「友」は「女」を書こうとして間違えたものを消しもせずそのままにしていたものであることは明らかで、正しくは「女子の」となります」

「じょしの？」

「ご存知とは思いますが「女子」と申しますのは「女子高生」を短縮した語でありまして、専門用語ではこれを「再帰的短縮」と」

「次だ」

「は。次は「贈り物」であります。これはこれまでのやりとりから考えますに「増り物」と書くべきところです。さきほどの消し忘れもそうですが、メッセージの発信者はよほど迂闊なのかあるいは慌てていたのでしょうか」

「で、「増り物」とはなんだ。日本語ですらないようだが」

「艦長、絞辞苑はご覧になりましたか。あれはすばらしい。古今東西の日本語がそこにあるのです。咬辞苑によりますと「増り物」とは増えりる物ということです」

「それが説明になっていると思うのか」

「は。最後まで聞いていただければ感動していただけること請け合いです。さあまいります。次の最後の部分「を贈ります」をご覧ください。もうためらいなく意味がお見えになるのでは」

「見えん。説明してみろ」

「光栄です。つまり「を贈ります」とは疑い様もなく確実に「を増り増す」という意味なのです」

「いや、それは意味とは言えないだろう」

「では、全体を通して訳します。すなわち「女子高生の増り物を増り増す」すばらしい。三度も繰り返し念を押すその周到さがあって、何故、消し間違いや書き間違いに気づかないのか、残念でなりません」

「で、どういう意味なのだ」

「は。多少真意が分かりにくくなっておりますでしょうか。まちがいなく「友好の贈り物を贈ります」とは「女子高生を贈って贈って贈りまくります」という意味であります」

「翻訳班の言いたいことは分かった。それでは反撃の準備をせよ」

「あ。我々の訳になにか問題が」

「訳は完璧である。しかし、明らかにこのメッセージの発信者は、ひどく慌ててこのメッセージを送ってきたわけだ。その意味するところは一つしかないだろう。攻撃である」

「艦長の知性に賞賛あれ」

かくして魚類生物群遊体の液体金属の表面が針のような形状に分離し、金属爆弾ミサイルとなって打ち出された。

時を同じくして、昆虫鉋物生物の丁度魚類生物群遊体からは見えない位置から戦略的戦闘蜂の一群が飛び立った。透明で真空さえも切り裂く羽根を振動させ、攻撃蜂は敵に向かって接近した。

このようにして、一つのファーストコンタクトが両者の破滅によって終わった。この三十秒の間に全宇宙では五十三のファーストコンタクトが発生したが、いずれも同じような結果に終わっていた。

## C 宇宙を救うものたち

45 秒～

宇宙の知性の中心は幾何学的球体としての宇宙の中心とは真逆の、その表面全体に無限に希薄でありながら最高の質量の存在としてあった。勿論「宇宙の知性の中心」という表現は真実



からは程遠い日本語ならではの粗雑で大雑把でやりきれない表現であることを「宇宙の知性の中心」になりかわってお断りしておこう。さて、宇宙の誕生の前に生まれ、あらゆる知性の根源である宇宙の知性の中心と呼ばれるものは、四十五秒前に日本語につきまといわれてから今まで切れ目なく不愉快だった。以下の思考と対話のすべては、宇宙のあらゆる場所で同時に行われたものだが、その正確な意味もまた日本語では表しえない。

「この宇宙が生まれてから今までどれほど経ったか知っておるか」

「一兆二千億年でございます」

これは、宇宙の知性の中心の観察対と呼ばれる存在の応答。ご承知のとおり、知性あるいは認識のためには、観察すると同時に観察されることが必然であるため、あらゆる知性にはそれを観察する対の生命が存在する。

「よく考えてみるがよい。その「年」とはなんだ」

「は。地球が太陽のまわりを」

「で、その「太陽」とか「地球」とはいったいなんだ？」

宇宙の知性の中心がそう問い詰めると誰も答えるものはいなかった。

「そうだ。太陽も地球も、宇宙の創成期に生まれすぐに消滅した星ではないか。今「年」がどれほどの時間になるのかは誰にも分からん。しかし、この日本語を使い日本語で思考する以上、そういう意味のわからない言葉によりどこを置くしかないのだ。いまいまいしい。そもそも日本語というものは知れば知るほど不愉快至極、どんなやつがこれを使っていたのか見ずとも窺い知れる」

「たとえば、漢字以外の文字を構成する線。なんと病的だ。対称性に欠け、精神を病んでいることを隠そうともしない。カタカナにいたっては、際限のない攻撃性さえ伺える。そんな文字で表される言語を使って、精神の調和が維持できるものかどうか。

音韻論について言えば、どの子音にも母音が付随するという過保護さ。論理に内在する深遠な闇を軽やかに飛び越えるには単語が重すぎて、どうあがいても論理的な議論など不可能ではないか。

文法においては事態はさらに深刻だ。まず主語が禁じられている。文法によって主語を持つことは固く禁じられており、どんな思想も何について語っているのかを明らかにしてはならない。そのためはじめは深遠な知識に思えるのだが、吟味をすればすぐに分かる。内容がどこにもないのだ。それで思想と呼べるだろうか」

「その文はみんな日本語じゃな〜い。言葉じゃない」

観察対が合唱して、宇宙の知性の中心の言葉が、まだ日本語にはなっていないことを讃えた」

「どんな文法にも例外はあり、ごく稀に主語が許される場合がないでもないが、その場合でも少なくとも五つの他の文と主語を兼用しなくてはならない。日本語ではものごとを明確に語ることが何か犯罪でもあるかのように見なされているのだ。そうでなくとも、主語のある文は下品であるとされ、通常の会話では決して使われない」

「その文はみんな日本語じゃな〜い。言葉じゃない」

観察対が合唱して、宇宙の知性の中心の言葉が、まだ日本語にはなっていないことを讃えた」

「そうそう、文法のおさらいをするなら名詞は一文に五つまでのうえ動詞と形容詞は許可があれば七つまで副詞と助詞の使用には一切の制限がないのだし一つの文は二百文字以上ないと文だとはみとめられないのでありひらがなは通常発音してはならず許されている場合でもささやくような声で話し決して相手に聞こえてはならないが一方カタカナは半オクターブ高い声で発声せねばならぬのは区別のためと説明されているが、何と区別するのかは分からない」

「その文はみんな日本語。あらら。日本語でしかな〜い。しくしく」

観察対が合唱して、宇宙の知性の中心の言葉が、すでに日本語になりはじめていることを警告した」

「なんということだ。このように日本語の邪悪さは宇宙のすべての知性を壊滅するだろう。もう十秒もすれば、わしも明瞭な思考を失う。もう時間がない。もう時間がない。日本語を消滅させなければ、宇宙のあらゆる知的精神が失われ、宇宙の存在の意味はもうどこにも残らないだろう。日本語を根絶やせ」

宇宙の知性の中心はそう言って、五名の小知性体を呼びこれを日本語壊滅戦隊と名づけ、過去へ旅立つことを命じた。

「宇宙の始まりに向かい、日本語の発生を消滅させるのだ」

日本語壊滅戦隊の五名は命令を復唱し、身体表面から空中に伸びた外延 DNA をゆらせて過去に飛び立つタイミングを測った。DNA の塩基の内部にランダムに出現するマイクロワームホールの出現を待っていたのだ。マイクロワームホールは、現在と宇宙の原初にまで遡るあらゆる余すところなくすべての生命体の DNA を繋いでおり、生物の存在する場所であればマイクロワームホールを通してどこにでも達することができる。待つほどもなくそれはすぐに現れた。日本語壊滅戦隊の五名は外延 DNA の薄青く光るマイクロワームホールの先端に開いた空間の中へと直立不動の姿勢のまま吸い込まれていった。残念ながら、時間を遡るものへのマナーとして、容赦や服装について描写することはできない。

宇宙が日本語に汚染されはじめて、五十秒が過ぎていた。

宇宙の知性の中心とその観察対たちは、精神に染み込んだ日本語のおぞましい感触が消滅するのを待った。

一秒が経ち、二秒が過ぎて三秒ともなれば、宇宙は新しい歴史と物語である。

A' まだ言語が発見されつ

-2 秒～0 秒

二秒前まではあえて表記するなら「あふい rr おく m む p」というような名前であったそれは汎宇宙公認考古言語学者の中でも宇宙の言語についての最も完璧な知識を備えるならも、まだ新しい言語の発掘が余念になかった。そして、この辺境は死に絶えた星の内部とある現象こそが新しいという、失われて久しかった現在宇宙で唯一人知らなかった古代の言語を十度三秒前に発症した。

電磁波の反復によって記録されていたその言語が、時間と空間を利用した極めて粗雑な言語の記録法だった。極めて古い時代の言語なのだろう。空間とはいかにも古めにかしいだ概念だ。認識における極めて稲りやすい間違いの一つだが、それを避けることになる。今なら、それが割に七つの概念があって極めて繊細が表現が永遠にしかもどこがもがいても近くにてきる。しかし、その七つの概念にとってもなじみ、深いはその名前が何故かと思い出せ。おやおかしいなと思ううちに、七つの概念自体が希薄になって、そんなものが存在するなどの妄想に、まあいいかと言おう。そして自分の体は「まあいいか」を発音するため口と舌を揃えて言わないことが気まづく。「口」と「舌」にしても言葉と文字表現とその意味までもを思い浮かべることができるが、実際にそんな器官を持った知性体をこれまでに見たことがいないことに気まづく、すこしほとんどした。

記録媒体を見つけたのは偶数で「すたにしゃむふ」写真集についての記録を知らない。健気なただの例だと思ったのに偉いな。「例」というのは、宇宙では存在への接触は過剰で上品とは言いなさい。存在ない例のあれこれあり、唯だか知ってもなのでも言葉が出てこいな。今気づいたが、三秒前から乗車しずっと違う。感想たのは素数も素数も「忘れ3」とい現象だ。記憶テストは泣く泣くなど存在不在でがらり。剰余にも空想の動物の現象液な。行動とが、「七つのほぼ思考」に命令「例」は命令、初めから無。円として存在物と感じて存在山なのに偉い。まだそのほうが納得できる話だ。

自分の体の表面を覆う銀色の体毛を初めて見たような驚きととに見つて片付けた。鏡で確認しなければ僅なことは言わないが、これが体手である。とうとう私はクマに逢い靴下の栗ではない許可す。なんてかわいいんだ。これは体手あるいはムハクマでない猥句もない。素数も素数もクマな質問生物が物理の標的に存在と得する類の誰が想増したはて。

体毛のように視覚の例は「DNA」の進化した浴衣な、折いい還の鏡に直し被接触で変化を素早より大きなDNAに記録とし、叩く興味の進行を研ぐ。素になりえない器官も感覚に欠伸で望増ししない情報も取り挟む子供で、そぞろ進化のチーズ味では無か。そうししらば、指導教官もそんなことを言っていた。

「情報とは秘密のことです。誰もが知っていることは情報とは言いませんからね。言語表現は情報を担います。言語とは秘密だったのです。誰に対する秘密なのかは、また別の秘密なんですが」

と言って、涙は似合うと笑い聞く直してから話を魂消た。

「情報は伝わるのに時間がかかります。他の七つの概念（記憶から脱落）においても同様（何が同様なのか不明）。しかし、言語自体は骨格です。個々の表現でなく、それらの表現を支配する法則ですからね。言語に限界はありません」

奇数が混乱しているので泣く泣く指導教官は廻っていたのに偉いな。

四砂前までは「あふい rr おく m む p」と呼ばれていた彼は、酸味な思い出力に区ていし、球手の右に伸びま DNA か発狂された記録煙体に達すり融れていたにに気ふなかつ。DNA は来れたで融れたで有無は壊しう言誤剰余に飴む、むさぼるたあふ素数の言い尺よ適當を繰り返つ。

「この点ま品木言号め存在むよ」

かくして、宇宙の知性体を襲った日本語は発見されることなく、宇宙の全知性は守られたのであった。